1997年度日本オペレーションズ・リサーチ学会
秋季研究発表会

# 社会・組織の心理的側面：ネットワークに現われたリアリティの一端

01103160　愛媛大学　栗原宏文　KURIHARA Hirofumi

## 1.　あらまし

近年、ネットワークを介したコミュニケーションにより、社会・組織の心理的側面を、従来の文献や著作など静的情報の領域を超えて、生きた（本音）情報として認識することが可能になって来た。

筆者は過去数年の間、ニフティやインターネットの中でもコミュニケーションに重点を置いた討議型ネットワーク上で遭遇した、社会・組織に関する数多くの心理的やりとりや言説をログの形で蓄積して来た。今回の発表の機会にそれ等を主題別に整理し、枝葉を切り捨てて、参照しやすい形にまとめてみた。

ここでは、その集大成全体を紹介することは不可能なので、それは目次によって紹介するに止め、その中の一部の言説のエッセンス、つまりネットワークに現われたリアリティの一端を紹介し、それが意味するものおよび、こうした試み自身が持つ役割について考察してみたい。

## 2.　支配かコミュニケーションか

2.1 支配を超えて　95/09/05~96/08/15

*2.1.1 身近な支配を無くせるかどうか　95/09/05*

*2.1.2 自分と向き合うべき　95/09/05*

*2.1.3 異質の尺度の存在を組織内に許容する空気　95/09/10*

*2.1.4 「弱者」が「強者」を支配するやりかた　96/03/03*

*2.1.5 「コミュニケーション」を操る「管理型」社会　96/03/30*

2.2 意見が違う人のなかへ　94/10/11~26 Dec 1996

## 3.　宗教、民族、新たな絆は？

3.1 宗教とオウムとどこがが違うか　3 Oct 96~26 Oct 1996

3.2 ネットワークでの暴力と洗脳　95/11/03~20 Jan 1997

*3.2.1 インターネット・ハラスメント　95/11/03*

*3.2.2 オンライン上で市民運動を混乱・破壊　2 Apr 96*

*3.2.3 情報メディアは潜在的共有意識の次元を攪乱するように働く　96/05/04*

*3.2.4 情報余り社会は洗脳社会　96/09/01*

*3.2.5 社会の制御がきかなくなる　20 Jan 1997*

## 4.　カルトから、いかにして民主主義を守るか

4.1 断絶とカルト　94/08/08~96/09/27

*4.1.1 学歴による差別　94/08/08*

*4.1.2 神経症になるか新興宗教に走るか　95/03/30*

*4.1.3 宗教の本来の役目　95/04/13*

*4.1.4 日本を支配するために何も過半数の支持を得る必要がない　95/05/02*

*4.1.5 全体性の幻想と宗教　95/09/17*

*4.1.6 断絶について考えてみる　95/11/19*

4.2 カルトの克服　96/02/01~28 Nov 96

*4.2.1 批判的理性なき精神世界の探求は、カルトの犠牲者を増やす　96/02/01*

*4.2.2 宗教を盲信する人、盲信させたい人　96/02/21*

*4.2.3 「組織的な犯罪」の克服の一つの例　96/06/08*

*4.2.4 カルトから、いかにして民主主義を守るか　28 Nov 96*

## 5.　日本社会とインターネット

5.1 日本人と思想　94/05/29~09 Jan 1997

5.2 他者性の欠如　95/04/13~30 Dec 96

5.3 マスコミと大学の特殊性　94/12/04~30 Nov 96

5.4 インターネットは自家中毒を解毒する　94/07/14~96/08/15

5.5 共同体の崩壊と国際化　94/09/12~96/08/03

## 6.　日本企業の正念場



© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

6.1 アメリカ方式の方が圧倒的に優勢　95/04/08~18 Nov 1996
6.2 島の中で通用する、慣れ親しんだ論理　12 Mar 96~10 Apr 1996
6.3 日本企業とアカウンタビリティ　15 Apr 96~20 Apr 96

## 7. 日本型コミュニケーションかロジカルコミュニケーションか

7.1 ロジックを超えて　2 Apr 96~96/08/20
7.2 日本型コミュニケーションかロジカルコミュニケーションか　22 Nov ~27 Nov 96

## 8. 言説のエッセンス：キーワードとしての言の葉

### 8.1 支配かコミュニケーションか

#### *8.1.1 支配を超えて*

人類が、もし万が一、平和というものを希求しているのであれば、まずは身近な支配を無くせるかどうか考えねばならないと私は思います。

人と向き合う前に、自分と向き合うべきなのだ、自分の中で争ったり、問いかけたりしてる人のみが、真に他者に優しくなれる

一つの尺度が揺らいだら、新たな、前と矛盾しないより根源的な尺度を探すような努力が必要になります。　その為には、最初から異質の尺度の存在を組織内に許容する空気が必要となるでしょう。

#### *8.1.2 意見が違う人のなかへ*

「わかっている」というのは、なんらかの「観念・価値規範」を「共有」していること　・・・そして、「わかっていない」ことは、それ自体、「指弾」されてしかるべきことと観念されるのです。　・・・訴訟に勝利すれば、自らの思想の「正しさ」が認められたこととなり、敗れれば「法廷」もまた自らの正しい思想を「排除」するところの「世間」の一角をなす「体制」にすぎない、という評価が下される。このような「論理」こそ、・・・（「観念・価値規範」を「共有」するか否かという）「思想」の特徴にほかなりません。

私は、村に入るに当たって、とりあえず理念は身から離しました。・・・もし私が、環境破壊はいけないといって、理念を振りかざしていたら、村の人たちは、私を敬遠するでしょう。・・・私が「教え」たんじゃだめです。村の人たちが、自分の問題として考え、その結論を自分の手でつかみ取ってほしい。目の前のことにこだわると、道が開けてこないように思うのです。だから、私は、自分と意見が同じ人より、意見が違う人のなかへ入っていくことを望みます。

### 8.2 宗教、民族、新たな絆は？

#### *8.2.1 宗教とオウムとどこがが違うか*

#### *8.2.2 ネットワークでの暴力と洗脳*

### 8.3 カルトから、いかにして民主主義を守るか

#### *8.3.1 断絶とカルト*

#### *8.3.2 カルトの克服*

### 8.4 日本社会とインターネット

#### *8.4.1 日本人と思想*

#### *8.4.2 他者性の欠如*

## 9. まとめ

ここで紹介した「ネットワークに現われたリアリティの一端」からも窺えるように、ネットワークを介したコミュニケーションは、社会・組織の心理的側面を、従来の文献や著作など静的情報の領域を超えて、「生きた（本音）情報」として提供することを可能にした。

「生きた情報」をいかに共有知識化できるか。それには従来の文献や著作という形式を超える新しい知の形式が要求される。また言説の著作権に関わる問題や引用、転載のルールに関しても、従来の枠を超えた新しい記述の形式が要求される。

しかし、そうした新しい知の形式、新しい記述の形式への関心は、まだ高いとは言えない。私の発表はそうしたものへの試みの一つに過ぎない。こうした模索や試みへの関心が高まることを期待したい。



© 日本オペレーションズ・リサーチ学会. 無断複写・複製・転載を禁ず.